

「ローマ教皇と長崎と核廃絶」

2020年12月6日

教皇ヨハネ 23 世回勅「地上の平和」(1963 年) (抜粋)

正義、叡智、そして人間の尊厳の尊重のためには、軍備競争に終止符が打たれること、既成の軍備が同時かつ平衡的に縮小されること、核兵器が禁止されること、そして最後に、有効な監視を伴っての軍備全廃達成が切実に要求されます。

第二バチカン公会議「現代世界憲章」(1965 年) (抜粋)

つねに新しい兵器を準備するために莫大な富が費やされているのに対して、いま世界中にはびこっている悲惨をいやすために十分な対策を講じえないでいる。諸国間の紛争が真に根本的に解決されるどころか、世界の他の地域にまで広がっている。このつまづきを取り除かれ、世界が不安の圧迫から解放されて真の平和が回復されるには、意識改革から出発して新しい道を選ばなければならない。

したがって軍拡競争は、人類にとってもっとも重い傷であり、貧しい人々を耐えがたいほどに痛めつけるものである、と重ねて宣言せざるを得ない。軍拡競争が続くならば、いつかはあらゆる致命的な惨事を引き起こす恐れが大であり、そのための手段はすでに準備されている。

カトリック教会のカテキズム (1992 年)

都市全体または広い地域をその住民とともに無差別に破壊するための戦争行為はすべて、神と人間に対する犯罪であり、ためらうことなく断固として反対すべきです。

現代戦争が危険なのは、化学兵器、とくに原子力兵器や生物ないし化学兵器の保有国に、そのような犯罪を犯す機会を与えるということです。

新しい兵器製造に用いられる巨万の富の消費は、貧しい国の人々を救済する妨げとなり、諸民族の発展を阻害する。過剰軍備は紛争の理由を増やし、対抗軍備の増強に拍車をかけかねません。武器の製造や売買は、諸国家ならびに国際社会の共通善に抵触します。政治をつかさどる者にはこれを規制する権利と義務があります。

ヨハネ・パウロ二世 広島平和アピール (1981 年 2 月 25 日) (抜粋)

過去をふり返ることは、将来に対する責任を担うことです。広島を考えることは、核戦争を拒否することです。広島を考えることは、平和に対しての責任をとることです。この町の人々の苦しみを思い返すことは、人間への信頼の回復、人間の善の行為の能力、人間の正義に関する自由な選択、廃虚を新たな出発点に転換する人間の決意を信じることにつながります。戦争という人間がつくり出す災害の前で、「戦争は不可避なものでも必然でもない」ということをわれわれはみずからに言い聞かせ、繰り返し考えてゆかねばなりません。人類は、自己破壊という運命のもとにあるものではありません。イデオロギー、国家目的の差や、求めるものの違いは、戦争や暴力行為のほかの手段をもって解決されね

ばなりません。人類は、紛争や対立を平和的手段で解決するにふさわしい存在です。文化、社会、経済、政治の面で、さまざまな発展段階にある諸国は、多種多様の問題をかかえており、そのために、国家間の緊張や対立が生じています。こうした問題は、国家間の正当な協定や、国際機関のよって立つ、平等と正義という倫理原理に添って、解決されねばなりません。それは、人類にとって肝要なことです。国内秩序を守るために法が制定されるように、世界の国々には、国際関係を円滑にし、平和を維持するための法制度が作り上げられなくてはなりません。

この地上の生命を尊ぶ者は、政府や、経済・社会の指導者たちが下す各種の決定が、自己の利益という狭い観点からではなく、「平和のために何が必要かが考慮してなされる」よう、要請しなくてはなりません。目標は、常に平和でなければなりません。すべてをさしおいて、平和が追求され、平和が保持されねばなりません。過去の過ち、暴力と破壊とに満ちた過去の過ちを、繰り返してはなりません。険しく困難ではありますが、平和への道を歩もうではありませんか。その道こそが、人間の尊厳を尊厳たらしめるものであり、人間の運命を全うさせるものであります。平和への道のみが、平等、正義、隣人愛を遠くの夢ではなく、現実のものとする道なのです。

第 266 代 教皇フランシスコ (ホルヘ・マリオ・ベルゴリオ)

1936 年 12 月 17 日 アルゼンチンのブエノスアイレス生まれ。家族はイタリアからの移民

1958 年 イエズス会入会(21 歳) 1960～1970 年 人文学、哲学、神学研究

1971～1973 年 イエズス会修練院副院長 1973～1979 年 管区長

1997 年 ブエノスアイレス大司教着座 2001 年 枢機卿親任

2013 年 3 月 13 日 第 266 代ローマ教皇選出

教皇フランシスコ使徒的勅告「福音の喜び」(2013 年 11 月 24 日)

平和とは、すべての人と一人ひとりの人間の全人的な発展の実りとして生まれるものです。そうでないものは、未来に向かうものではなく、常に新たな紛争と種々の暴力の火種となるのです。

「人間の全人的な発展」とは、諸国民の間に経済格差や排除がないこと、だれ一人排除されず、だれもが参加できる開かれた社会であること、人間の成長発展に不可欠な要素である経済、文化、家庭生活、宗教などが保障されること、個人の自由と共同体への帰属からだと魂に神が現存されることを意味します。

教皇フランシスコ 2015 年 8 月 9 日(日) 正午の祈りの後の話

70 年前の 1945 年 8 月 6 日と 9 日、広島と長崎にすさまじい破壊力をもつ原爆が投下されました。この悲劇的な出来事は、長い歳月を経てもなお、恐怖と嫌悪感をかきたてます。それは、科学と技術の進歩をゆがんだ形で用いるときに人間がもつ、計り知れない破壊力の象徴であると同時に、戦争を永遠に放棄し、核兵器とすべての大量破壊兵器の使用を禁

止するよう永続的に呼びかける警笛でもあります。この悲しい記念日は、兄弟愛の倫理と平和的共存の機運を世界中の人々に広めるために、とりわけ平和のために祈り、働くよう私たちに呼びかけています。

あらゆる所から、声をひとつにした叫びが沸き起こりますように。戦争と暴力に「ノー」、対話と平和に「イエス」と叫ぶ声が。戦争はつねに敗北をもたらします。戦争に打ち勝つ唯一の方法は、決して戦争をしないことです。

教皇フランシスコ 核兵器禁止条約について討議される国連総会へのメッセージ

(2017年3月23日)

テロ、軍事力の異なる者どうしの紛争、情報セキュリティ、環境の問題、貧困などは複雑に絡み合っており、21世紀の多極化世界で平和と安定を多面的に脅かす最たるものですが、核の脅威はそのような課題に効果的に応えることはできないのではないのでしょうか。

恐怖に基づく安定は、実際には恐怖をさらに増し、諸国民の信頼関係を損なうならば、どれだけ維持できるのか自問すべきです。

国際平和と安定は、互いの破壊または全滅の脅威とか、単なる力の均衡の維持といった、誤った安心感の上に成り立ち得ません。

平和は、人間の全人的な発展、基本的人権の尊重、被造物(自然環境)の保護、全ての人の社会生活への参加、諸国民間の信頼、平和を重んじる制度の促進、教育と福祉の恩恵に浴すること、対話と連帯の上に築かれなければなりません。

バチカンが核兵器禁止条約に批准した最初の3か国のひとつ (2017.9.20) ガイアナ・タイ

バチカンでの国際シンポジウム「核兵器のない世界と統合的な軍縮に向けての展望」における教皇フランシスコの発言

(2017年11月10日—11日)

「核兵器は見せかけの安全保障を生み出すだけです。…核兵器の使用と威嚇のみならず、その保有そのものも断固として非難されなければなりません。この点で極めて重要なのは、広島と長崎の被爆者、ならびに核実験の被害者の証言です。彼らの預言的な声が、次世代への警告として役立つよう願っています。

教皇フランシスコ 長崎 爆心地公園でのメッセージ (2019年11月24日) (抜粋)

愛する兄弟姉妹のみなさん、この場所で私たちが強く自覚するのは、人間がどれほどの痛みと恐怖をもたらしている存在であるかということです。被爆した十字架とマリア像が、長崎の教会で見出されました。これらは、犠牲者、そしてその家族の筆舌に尽くし難い苦しみを改めて思い起こさせます。

人間の心の中にある最も深い願いの一つは、平和と安定への願いです。核兵器やその他大量破壊兵器の保有は、この願いを叶える上で、最も的を得た答えとは言えません。それどころかこの願いを常に試練にさらしているように見えます。

私たちの世界は、邪悪な矛盾を抱えています。安定と平和を望みながら、恐怖と不信に基

づく偽りの安全の下で平和と安定を築こうとしています。それによって、国民同士の関係は蝕まれ可能なはずの対話が阻害されています。世界の平和と安定は、相互破壊への恐怖や壊滅の脅威に依存にする行為とは、相入れません。

連帯と協力という世界的倫理を持って将来に奉仕し、現在と未来の全て人類家族が互いに助け合い、共に責任を果たすことによってのみ、平和と安定が可能になるのです。

この街は核兵器が人類と環境にもたらした大惨事の証人です。軍拡競争に対して、もっと大きな声を上げ続けなければなりません。軍拡は、貴重な資源を無駄にしています。その資源は、人々の全人的発展や、環境保護に使われるべきです。

今日世界には、何百万の子供や家族が非人間的な状況の下で暮らしています。兵器に大金を費やし、兵器の近代化、維持、販売で大儲けし、兵器の破壊力を増す。これは神に背くテロ行為です。

平和で核兵器のない世界は、世界中の何百もの人々の切なる願いです。この理想を実現するには、全ての人の参加が必要です。個人、宗教団体、市民団体、核兵器保有国、そして非保有国、軍需産業、民間団体、国際機関の参加が求められます。

核兵器の恐怖への答えは、集団のコンセンサスに基づくものでなければなりません。そのためには、困難でも相互信頼という堅固な土台を築き、不信という支配的な流れを壊さなければなりません。

1963年、聖ヨハネ 23世は、回勅、地球の平和（パーチェム・イン・テリス）で、核兵器の禁止を訴え、真の安定した平和は、軍事力の均衡ではなく、相互信頼という土台の上でのみ構築できると述べました。

今ある相互不信の流れを壊さなければなりません。不信が拡大し、武器を制限する国際的枠組みが崩壊する危険があります。

また、私たちは多国間主義の弱体化を目の当たりにしています。兵器の新たな技術が開発されていることを考えると、これは由々しき事態です。こうした動きは、人々が強がりをも強める今の世界と矛盾するものであり、世界の指導者がより注意を払い対処すべき問題です。

カトリック教会としては、人々の国家間の平和実現に向けて不退転の決意を高めています。それは、神・に対して、この地上に人々に対する私たちの責務です。私たちは、迅速に行動を起こし、訴えていきます、軍縮や不拡散についての主要な国際法の原則に従い行動し、訴えていきます。

この原則には、核兵器禁止条約も含まれます。昨年7月、日本の司教協議会は、核兵器廃絶を呼びかけました。また毎年8月に、日本の教会は、平和に向けた10日間の祈りの会を行なっています。どうかこの祈りが、合意の形成に向けてのあくことなき模索が、そして対話の努力が私たちのパワー、すなわち武器となりますように。

そして平和を真に保証する正義と連帯の世界実現に向けての努力を鼓舞しますように。核兵器のない世界は実現可能であり、かつ必要されている。この確信を持って政治の指導者の皆さんにお願いします。

核兵器は、世界の、または国家の安全の脅かす脅威から私たちを守ってくれるものではないということを、忘れないでください。人道的観点から、環境の観点から、核兵器の使用がもたらす壊滅的な破壊を考えねばなりません。

また、恐れ、不信感、敵意など、核の理論によってもたらされる感情が増幅するのを食い止めなければなりません。現在の地球について、その資源が、どのように使われているのか、真剣に考える必要があります。

複雑かつ困難が伴う持続可能な改革のための 2030 年アジェンダの達成、人類の全人的な発展というこの目的を達成するためにも、地球の資源の使われ方を真剣に考える必要があります。

1964 年、すでに教皇パウロ 6 世は、貧しい人々に対する、援助のための世界基金の創設を提案しています。防衛費の一部を元に創設される基金です。これらを実現するためには、信頼関係と相互の発展を確かなものにする構造を築くことが極めて重要であり、このような状況に対応できる指導者の協力を得ることがまた大変重要でもあります。これは私たちが関わる使命でもあるし、またそのために皆が必要ともされています。

今日大勢の人々が苦しんでいます、彼らの苦しみに私たちの良心は痛みます。

このような彼らの苦しみに無関心でいるのに許される人は一人としていません。また傷の痛みに叫び声をあげる兄弟の声に、耳をふさぐことを許される人は一人としていません。対話を否定する文化がもたらす破壊を目の当たりにして、目を閉ざすことを許される人も一人としていません。

毎日私たちと心をつなげて、祈ってください。両親のために私たちと祈ってください。また、命を大切にする文化、赦しの文化、兄弟愛の文化が勝るよう祈ってください。

この兄弟愛は、互いの違いを認め、それを保証する愛であり、共通の目的地を目指す中で、互いの違いを認め合い、保証しあう愛です。ここにおられるみなさんの中には、カトリック信者ではないみなさんもおられることでしょう。しかし私たち全員が祈ることができると思っています。

アッシジの聖フランシスコに由来する平和の祈りが、私たち全員の祈りとなると確信しています。

主よ、私をあなたの平和の道具としてください。

苦しみがあるところに愛を。諍いがあるところに赦しを。疑いがあるところに信仰を。

絶望があるところに希望を。闇に光を。 悲しみがあるところに喜びをもたらすことをしてください。

記憶をとどめるこの場所は、私たちを覚醒し、私たちが無関心であることを許しません。そして神へのさらなる信仰がここから生まれます。

また私たちが真の平和の道具となって、働くよう導いてくれます。そして過去と同様の過ちを犯さないよう、導いてくれます。

皆さんとご家族、そして全国民が、繁栄と、社会の輪の恵みの享受できますよう、お祈りいたします。